

## 柔らかく、おもしろくをニセコ町から。

通称「蝦夷富士」として親しまれる羊蹄山のすぐ麓。あまりの迫力に息をのむほどだが、ニセコ町への門戸であるJR函館本線ニセコ駅はまさにそこにある。駅から5分とかからず、目的地のニセコ中央倉庫群にたどり着いた。歴史と新しさが共存するこの場所で、奥田啓太さん(38)が我々を明るく出迎えてくれた。

奥田さんはニセコ町の景色に魅了され2016年に札幌からの移住を決意、ニセコ町の地域おこし協力隊の一員としてこの地に足を踏み入れた。卒業後は倉庫群の館長を任され、カフェ経営、移住定住相談、食品加工事業と多様な活動を行ってきた。現在は奥さんと2人のお子さんと共に暮らす。移住相談とオリジナル商品である「ゆり根バター」の生産に注力されている奥田さ



夏の羊蹄山。ニセコ町内の道の駅から。「きれいに見えることはあまりないですよ。その中でたまに見える喜びというのが羊蹄山の魅力ですね」

んの暮らし方と柔らかかな人柄、そしてニセコ町の魅力について、ここではじっくりと見ていこう。ニセコ町への観光、はたまた移住を考える方にはぜひ参考にさせていただきたい。

### 羊蹄山に導かれて。

「きつかけは景色の良さでした。特に夏の景色の良さが好きで」

元々札幌に住んでいた奥田さんは、羊蹄山の見えるニセコ町の景色が大のお気に入り。毎週訪れていたそう。そのうち移住するつもりでいたようだが、「老後まで待つ必要はないのではないか」「元気なうちに働き、友達を作ることにより豊かな生活ができるのではないか」と思い当たった。パティシエをしていた奥さんとともに、ニセコ町でカフェを経営することを夢に移住を決めた。

ゆくゆくは地元の農産物を使ってお店を開きたいという思いから、地域おこし協力隊として道の駅での野菜販売事業へと配属された。この活動によって農家とのつながりもできた。しかし、最初は野菜の知識が全くなかったことで、お客さんに食べ方を聞かれた際には苦労することも。それもそのはず。ニセコの道の駅は多品種・小ロットの販売が特徴で、見たことがない野菜が並んでいること

も珍しくない。自分たちで調理を行い美味しかった食べ方を共有したり、時には周りの人に聞いたりすることで知識をどんどんと吸収していったそうだ。

ちなみに奥田さんのおすすめの野菜はトマト。それまではそれほど好きではなかったが、ニセコ町のトマトは美味しいと絶賛する。農家さんが作るものはもちろん、家庭菜園で作ったものにも違いがでるといふ。一日の寒暖差が大きいというこの地域特有の気候が、糖分を蓄える野菜にとって大きなメリットがあるのだそうだ。

協力隊として畑の手伝いを行ったことも。はじめて出向いたのがゆり根の畑だった。現在の活動につながるものとして、ゆり根とはふしぎな縁があったのかもしれない。畑仕事を体験することで「農家の人は凄い！」と改めて感じ、野菜の安さに驚いてしまったという。

さらに町のための仕事として、配属先を超えた「協力隊活動」と呼ばれる取り組みにも参加した。地域のイベントの補助や企画を行い、地域コミュニティを盛り上げ良好な関係

### 『地域おこし協力隊とは。』

地域力の維持・強化を目的として、新たな発想・能力を持った人材を都市から誘致する制度。町に採用された隊員は、農業と観光・商業など広い分野から配属先が決められ、地元の人と協力して活動を行う。ニセコ町の協力隊については、ニセコ町HP (<https://www.town.niseko.lg.jp/iju/live/chiikiokoshi/>) で詳しい情報を見ることができる。



ニセコ中央倉庫群。でんぶん工場を改装し、地域の交流の場として様々なイベントも行っている。

を築いていった。

ニセコ町で生きていく。

協力隊として3年の活動を終えた後は、ニセコ町から中央倉庫群の館長を任された。館内には念願のカフェをオープン。遊具やワークスペースも整え、お父さんは仕事をしながら、お母さんはコーヒーを飲みながら、子どもは遊びながらと家族みんなで楽しめる空間を作り上げた。

奥田さんは移住支援の活動も行っている。相談員としてよく聞かれる質問は、やはり冬季の雪事情だそうだ。しかし、道路が広く少ないニセコ町は除雪が行いやすく、実は札幌よりも苦勞が少なくと語る。雪国での生活を知っている人にとってはそれほど心配をする必要はないのかもしれない。車が必要になることもあるが(隣の倶知安町へは15分ほど、札幌へは2時間ほどでいくことができる)、道幅や交通量に余裕のあるニセコ町ではマイペースに運転を覚えていくことができるのではないだろうか。

移住相談者の大半が道外に住んでいる方

だそうだ。移住を考えている方へのおすすめは、やはり旅行を兼ねて現地を自分の目で見ることに。特に冬季の環境を体験しておくことは大切になる。

外国からの移住者も増加傾向にある。協力隊としての志願者もいるのだそうだ。町には英語の案内も充実しており、外国人にとっても住みやすい環境ができています。言葉の壁を越えて、彼らはすぐにニセコ町に溶け込んでいく。ハーフの子どもが増えており、様々な国にルーツを持った人々が当たり前前に暮らしている。

さらにニセコ町役場には子ども未来課が創設されるなど、町全体が子どもを大切にす環境づくりに取り組んでいる。多様な人々が生活し自然に満ち溢れた空間だからこそ、子どもにとっては大きな刺激になるだろう。このようにニセコ町の特徴は、新しい取り組みに積極的などころであるという。移住者に対しても、地元の人々は温かく受け入れてくれる。お互いを尊重する気持ちがあれば町での生活にすぐなじむことができそうだ。

ニセコ町への移住は、まさに「転職なき移

住」というコンセプトがあっている。都市での仕事を継続しつつ、生活はニセコ町で。移住には少なからずストレスがかかる場面があるため、奥田さんの理想として、もしもの時に備え移住前のつながりを保っておくのだそうだ。奥田さんの前職であるIT業はその一例であり、特にITを含めたクリエイティブな仕事やデザイナーやイラストレーター、芸術家等の場所を問わずに発想力を求められる仕事をする方にとってはメリットがあるのではないかと。羊蹄山をはじめとした自然をボーと眺める時間も、時には新たな発想を生み出すために有意義



終始笑顔でお話されていた奥田さん(合同会社ニセコベースキャン代表社員)。ニセコ町について聞きたいことがある方は、ぜひご連絡を。

になるだろう。

移住のポイントとなるのは、移住先でのイメージを固めすぎないこと。ニセコから離れていく方の中には、想像していた生活とのずれを原因として持っていることがあるらしい。逆に移住することばかりに力が入り、移住自体が目的となってしまうことも…。ときには「失敗してもなんとかなる」といった気持ちを持ってるように環境を整えることも必要だと話す。先の生活を考えつつも決めすぎないようなバランスを保つ。奥田さんは「臨機応変に対応できるような、リラックスした状態で来た方が良い」と話す。「雪がたくさん降ってきたなく、かまくら作っちゃおうかな」くらいの柔軟な感覚の持ち主にはニセコ町はぴったりだという。

未来のことも柔らかに。

魅力にあふれたニセコ町であるが、課題も残されていると奥田さんは語る。例えば、どんな時でも十分な医療を受けることができるのかという問題がある。ニセコ町は隣の倶知安町に総合病院があるため特別に心配す

### 『ちょっと一息。ゆり根バターの魅力。』

奥田さんが現在最も力を入れて取り組んでいる「ゆり根バター」づくり。日本のゆり根の8割はこの地域で作られているそうだが、実は地元よりも関西方面への出荷が中心になっている。高級食材のため目にすることは多くないが、良さがわかるひとに届けていきたいと語る。「ゆり根バター」はゆり根の食感を残したクリーミーなジャムのようなイメージ。ゆり根にはリラックス効果があるため、ホットミルクに入れて飲むのが相性抜群だそう。



以前営業していたニセコベースカフェのインスタグラムより。

ることもないそうだが、地方での医師不足は深刻な問題となっている。

またニセコ町の人気が高まるにつれて住居の空きが少なくなっているという問題も。ネット上には限られた情報しか載っていない。地元の人とのつながりで紹介してもらえないこともあるらしく、やはりできる限り現地を訪れることが大切になる。

さいごに奥田さん自身のこれからの目標

についてお聞きした。「まずは地域課題の解決に取り組みたい。ニセコ町にある問題をビジネスの力で解決していきたい」と語る。例えば食品ロスの問題。「ゆり根バター」の生産はその取り組みのひとつである。また、地方を盛り上げるために重要な人の流れをつくることも、移住支援として力を入れていきたいという。夢であったカフェを経営する中でその多忙さを実感し、現在はカフェを閉じ

ている。家族との時間を大切にすることも今の自分にとっては大切なのだ、そう語る。それでも、食品に携わるという部分は変わらずに、形を変えていまにつながっている。「ニセコに永住するとは宣言していません。ただ、いまの自分にはニセコが合っていて、楽しんでるので。これからもニセコでやるから意味があるよね、というような仕事をしていきたいなと思っていますね」

コロナ禍を乗り越えて、ニセコ町も2023年ころから以前の活気が戻ってきたと話す。奥田さんは「おもしろい人」がニセコ町に来てくれることを楽しみにしている。現在のニセコ町を楽しみ、さらに「こうしたらもっと楽しくなるのではないか」とポジティブな気持ちを持って人と出会いたいと笑顔を見せる。「おもしろい人」がさらに「おもしろい人」を呼び込んでいくような、そんな好循環がニセコ町には徐々に生まれ始めている。奥田さんは間違いなくその最先端をひた走る一人であった。